

みちのくの地酒辛口春の雪

尾池和夫

今月の華

無心の絵、無心の一句

一九九四年三月二三日、京都大学理学部の研究室で猛烈に仕事している年度末で、フィリピンの事業計画を進め、ペルーの人の研究を支援し、日本の高性能地震観測網の設置計画を始動する準備をしていた。仙台で研究会を行い、京都に帰ってきて整理した中に、この一句が入っている。のちに第一句集『大地』の中に収めた。

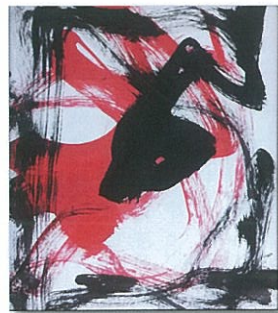
金久美智子主宰が「氷室」を発行してそれに投句するようになった一九九三年三月が、私の俳句歴の始まりであり、この句は俳句を始めて一年後の作である。出張中の一夜を、ただ書き留めたのだが、いまだに口をついて出てくる好きな句の一つである。

句集が出たとき、茨木和生さんが基本がわかっていると評してくれて、俳句の基本とはそういうことかと、後追いで理解するきっかけとなった。言われて気づいたのは、季語と名詞と助詞一つだけで一句ができていくことである。以後、学生たちに俳句を教えるとき

の例句となった。

高知の出身であるが、高知にいたのは一八歳までだから酒は関係なく私は酒に弱い体質である。それでもフィールドワークを主とする分野の研究者になって、各地の食べ物と合う酒をすすめられて味わう機会が多くなり、地元の暮らしに触れて愉しむ経験を積むことができたのである。俳句を詠みながら、その土地の歴史と暮らしを、大地の仕組みから理解しようという考え方に、今しつかりと結びついてきたと思っている。

ところで、掲載した絵は、私が芸術系の大学の学長になるという記念に、チンパンジーのアイが私のために無心に描いてくれた絵である。何の報酬もなしに無心にアイはこの絵を描いた。俳句も無心の一句がいつまでも残る句になるのだというおもいが、俳句を始め二五年になる今、ようやく理解できてきたと思う。



【私の愛蔵品】

「革命前夜」

作者はチンパンジーのアイ。京都大学霊長類研究所所属。アイを研究する松沢哲郎さんと齋藤亜矢さんが付けたタイトル。